

2011 ジョイント合宿・感想文

○3年生

板谷 洋介

今回のジョイントゼミ合宿は、もう一つのイベントである“学生によるまちづくり提案”の開催が連続するスケジュールとなり、同時進行の中で進めていった。後期ゼミが始まる前からタイトなスケジュールとなる旨は、中村先生や諸先輩方からアドバイスを頂いていたが、実際に発表への諸作業を進めていく中で、その厳しさを実感していった次第であった。この感想文では、その状況の中で思っていたことや感じたことを率直に述べるとともに、来年度の3年生への引継ぎ書としての意味を含めて記すこととする。

まず、今回の一連の発表に関して、当ゼミは他校のゼミと比較して準備期間が少ないとのことだったため、前期授業終了後の7月中からメンバーが集まり、今回の共通テーマ「水・くらし・行政」に沿った題材として“雨水の利用”の選択と、大まかな方向性を決めた。8月中には、ある程度の情報の収集を進めるとともに、暫定的に章立てを行い、調査の課題をメンバーで振り分け、ある程度の調査をしておくこととした。

分科会については自由テーマであるため、ジョイント合宿と並行して行われていた“まちづくり提案”の内容をジョイント合宿用に修正して発表するとしていた。このため、共通テーマよりも分科会の論文作成に注力し、テーマ設定と調査、論文の作成に時間を費やした。この点は“まちづくり提案”の完成度を高めたいという意向でもあり、良い判断であったと思う。ただし、共通テーマと分科会、それぞれの発表を終えてから、さまざまな反省事項があり、この時期の調査研究に関して改善点があると感じた。これについてはジョイント合宿を終えた後の項に述べることとする。

後期ゼミの始まりとともに、それぞれの論文の作成を本格的に進めることとなる。分科会で発表することとしていたデマンド交通は、この時期になってテーマ変更を経て決定した。これは、“まちづくり提案”で考えていたテーマが行き詰って変更することとなったという経緯があり、この点は“まちづくり提案”の発表に対し、その主旨に有効な論点の選択という点で見込みが甘く、影響したと反省している。こうして、結果的に遅いスタートとなったデマンド交通の論文作成ではあったが、メンバーの細川氏と佐々木氏のモチベーションの高さに支えられ、進めることができた。10月上旬にはデマンド交通の論文の構成はかたまり、それに伴う調査と資料集めを進めていた。“まちづくり提案”の論文提出が10月下旬で短い作成期間となったものの、それなりの完成度として提出できたのではないと思う。ただし、提出に際しては、直前のゼミで先生のチェックを受け、修正することとなる点について見込みが甘く、修正作業をすべて細川氏に負担させてしまった点は大

きな反省点となった。

その後は、“まちづくり提案”のポスターセッション関係作成と、発表用のパワーポイントと発表原稿の作成に追われ、厳しいスケジュールとなった。これは、ゼミ以外の講義の関係や、メンバーそれぞれの私用のためにスケジュールを合わせることが難しいことが影響したため、打合せや共同作業を円滑に進めることが難しい状況であった。同時に、共通テーマの作成も再開し、進めなければならなかったため、一部のメンバーに負担がかかる状況となってしまった。この点を省みると、共通テーマの調査と研究、論文の作成は、夏休み中にもっと進めておき、出来るならば暫定的に完成という程度まで進めておくべきであったと深く反省した。

準備段階の要点として、パワーポイントの作成とそれに沿った発表原稿の作成、そして指定された発表時間を前提としたリハーサルがある。共通テーマの発表時間は25分、分科会は30となっている。原稿の文字数にもよるが、共通テーマでA4用紙8枚、分科会ではA4用紙10枚で丁度良い分量となった。ただし、リハーサルと実際の発表では若干の時間差が生じるため、5～10%ほど少なめにしても良いと思った。ジョイント合宿では発表後に質疑応答があり、他校のゼミ生からの容赦ない質問があるが、きちんと調査して作成した発表であれば、徒に恐れるものではなく、時間の余裕を心の余裕とするほうが良いと思った。これらの発表準備についても、ゼミの時間にリハーサルを行い、中村先生他からアドバイスを頂き、修正することとなるため、早めに作成し完成度を高めるべきであったと反省した。これらの修正過程は週に一度のゼミの時間に行われて進めるため、逆算して作成日程の調整を行うべきであった。また、こうしたチェックの機会の多さは完成度に直結する活動であるので、もっと多くの機会を作るべきであったと思った。

本番では、私の発表の際に資料の確認不足に起因する不手際があったが、概ね良い発表が出来たと思う。他校の発表を見ていて感じたことでもあるが、多少のいい間違いや内容の修正は気にする程度のことではなく、堂々と間違い、堂々と修正することで問題はないと思った。共通テーマに関しては良い評価を頂いたポイントとして、手堅い構成やオリジナルの概念図、コストの試算などの具体性を持った論述は良かったと思う。また、他校のゼミと比較してパワーポイントの完成度が高く、良い発表に繋がったことは、作成に尽力した細川氏の苦労の賜物であろう。今後の中村ゼミの伝統となって欲しいほどである。共通テーマで指摘された“雨水”の読み方の点について触れておく。発表にあたり公的なHP等で確認し、専門用語でも使われていることから「うすい」と読んだが、一般的な「あまみず」の方が良いとの指摘であった。確かに、学術的に発表する場であるジョイント合宿ではあるが、より身近に、より具体的に訴えかけるという点では、「あまみず」という表現の方が良かったのかもしれないと思った。この指摘に見られるように、発表の戦略という点から、また、一つの社会現象を公に対して発信するという点からも、漢字の読み方や表現方法は十分な吟味が必要であると思った。

分科会のデマンド交通では、事前にあった“まちづくり提案”の発表を経たことと、発

表の時間の余裕が十分であったこともあり、ある程度満足のできる発表ができたと思う。この点に関して、四日市大学の小林先生から「楽しい発表でした。」との評を頂いたことで、自分の中では最高の栄誉を貰った気分であった。この点は、発表のみを発表と捉えず、質疑応答の時間も個性を出し、愉しさを前面に出したデマンド交通の内容を引き立てたいという思惑が叶い、良い点であったと思う。

ただし、問題もあった。まず、30分という発表時間を意識しすぎてパワーポイントのスライドの順番を変更したことで論文との関連性が崩れたために、オーディエンスの混乱に繋がった点であった。共通テーマで良い評価に繋がった構成の妙を、自ら崩してしまったことは失敗であったといえるだろう。また、例年指摘されているという「宇都宮大学は宇都宮市のことしかやらない。」という点も改善の余地があった。発表内容では、一部でさいたま市や静岡市に導入が有効として触れたが、これらの都市への具体的な導入方法を盛り込むことや、盛岡市などで実際に運営（郊外型ではないが）されている事例をある程度詳細に調査分析するなど、指摘されることもなく、更に完成度の高い、説得力の強い発表に繋がったのではないかと思う。これらの点について、やはり事前の準備段階から作成の過程で時間的な余裕があれば改善できたのではないかと思う。また、作成段階において多くのチェックを行うことで改善できた可能性がある。

他校の発表と、その他の機会に思ったことを挙げる。まず、総評において先生方からも指摘された点であるが、もっと大胆なテーマ設定や論法、行政提案があっても良かったと思った。四日市大学の羊水をテーマにした発表のように、デリケートな題材にも臆せず、中央学院大学の手賀沼のテーマのようにアクティブに活動し、若者らしい情熱が滲み出る発表を目指すことは重要なポイントであろう。また、発表を聞いている側として、全体の構成や各章の要点をチェックするなどの上、メモを取り、疑問点や理解できなかった点を積極的に質問すべきであると思った。また、率直に感想を述べることも、発表者側には自らとは違う視点に気づくきっかけとなり、別の発想に繋がるなど、参加者全員にとって以降の卒論作成などに良い影響が得られると思った。

以上の点から、来年度のゼミ生へのメッセージとして反省点を整理しておく。一つ目は、大胆なテーマ設定の上で緻密かつ具体的な調査研究を行い、論理的な構成を行うこと。二つ目は、リハーサル回数を多くできるようにスケジュールを組み、発表の完成度を高めること。これはメンタル面の余裕にも繋がる大切な点であろう。三つ目は、作成期間中のスケジュールの調整のために連絡は密に行うこと。特に、後期授業開始後はメンバーが揃う時間の調整は難しく、方向性の共有や、やるべきことの明確化、各作成物の進捗状況と作成期限、その完成品のチェックなど、係わる人数が多い方が品質の向上に繋がるとともに、一部のメンバーに負担が集中することを避けることができるだろう。四つ目として、当たり前であるが、中村先生と諸先輩方のアドバイスは良く聞くこと。これらの点に留意し、努めることで、来年度のジョイント合宿が、発表内容も参加時の充実度も素晴らしいものになると思う。

これらの反省をもとに、僭越ながらいくつかの提案をさせて頂きたい。まず、時間的な余裕を得るため、活動開始の早期化ができればと思う。本年度も“まちづくり提案”の関係で、早い時期に告知を受け7月から取り組んだものの、夏休みをもっと有効に使うことができたのではないかと反省している。今年の3年生は、成澤氏、田崎氏、板谷共に行政学ゼミに入ることを早くから決めていたこともあり、こうした感想を持ったということもあるが、参加希望者を早めに募り、暫定的なメンバーでのテーマ設定とスケジュールリングを行うとともに、ミーティングなどで具体的な活動をイメージしやすくして、初期から精力的な行動に繋がるようにするなど支援していきたいと思う。また、内容の深化のために、論文のチェックやリハーサルの回数を増やすことができれば更に良いであろう。これらの提案は、中村先生や先輩ゼミ生にも負担になり、来年度のゼミ生の自主性を尊重するという点からも慎重な対応を必要とし、尚且つ、高い目標到達を目指すという困難なものであるが、できる限りの支援をしたいと思うところである。

最後に、さまざまなアドバイスと温かいお声掛けを頂いた中村先生、舘野さん、白さん、南さん、陳さん、4年生の諸先輩方、そして奮闘したメンバー全員に心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

佐々木 舞

今回のジョイント合宿で、私は自分たちの提案をどのように文章化してプレゼンをするか、また、それに至るまでにどのような調査をすればいいのかを学ぶことができました。今まで学校生活の大半を工学部で過ごしてきた私にとって、論文への取り組み方というものわかりませんでした。しかし、ゼミのみんなの取り組み方を間近で見たり、他校の学生の発表を見る中で、このように筋立てをして説明をすれば伝わりやすい、とか、実際に現地で調査をする大事さを学ぶことができ、とても視野が広がりました。最後の打ち上げでほかの先生方のお話を聞いたことも大きな収穫だったと思います。こんな風に他大学と議論を交わし、準グランプリまでいただくことができ、とても楽しい3日間となりました。

指導して下さった裕司先生をはじめ、中村ゼミのみんな、先輩方、ジョイント開催に携わって下さったみなさん、本当にありがとうございました。

田崎 亜季

JOINT合宿は、刺激的かつ非常にためになる2日間だった。他大学と政策をぶつけ合い、新たな発見や驚きがたくさん得られたし、一つひとつ問題を突き詰めていけば、自分でも政策を作れるんだ、と分かったことが大きな収穫であった。「政策」と聞くと近づきがた

いものようだが、「社会をよりよくしたい」という思いを形に表すだけのことであった。もちろん、形に表すことが一番大変な作業なのだが、現状を調べ、問題点を洗い出し、それらを突き詰めることは面白いことだとわかった。

準優勝という素晴らしい賞をいただくことができ、今までの頑張りが報われた気がした。正直、提案を発表するまで自分の考えに自信を持たず、「もうすでに行政で行われている施策ではないか」「これが政策提案といえるのか」など、思うように進められなかった。しかし、賞を頂けたことで、「これでよかったんだ、次はもっとより良いものを作りたい」という意欲につながった。そして何よりも、仲間との頑張りがいい結果に結びついたことが、一番うれしかった。一人より、みんなでやった方が、喜びが倍以上になることが実感できた。集団での話し合いは、思うように進まない時もあったり、自分の意見に自信がない状態でも伝えなくてはならなかったり、テーマからずれたくなったりもしたが、仲間がいたことで、「それでも進めなくては」と頑張れた。

ただ、賞に見合うだけの政策提案であったか、という部分には疑問が残る。より積極的に現地調査をおこなったり、より多くの文献にあたるなどの努力ができていれば、よりよい政策ができたかもしれない。今回得た反省を今後に生かしていきたい。

成澤 友里

今年は、まちづくり提案の一週間後にジョイント合宿ということで、スケジュール的はかなり厳しいものでした。分科会はまちづくり提案で発表したテーマでいくとはいえ、まちづくり提案の発表は10分に対して分科会は30分。まちづくり提案はどれだけ簡潔に伝えられるかという問題でしたが、ジョイントは30分間をいかにして使うかという別の意味での時間との戦いでした。

さらに、共通テーマでは、6人で協力して論文を作り上げるというチームプレーの難しさを知りました。スケジュールが合わないためになかなか集まることができなかつたり、議論がまとまらず、堂々巡りになることもありました。しかし、1つのテーマに関して、これだけ長い間熟考し、話し合う機会は今までなく、とてもよい経験だったと思います。さらに、自分1人では嫌気がさし、手を抜いてしまいそうになることも、6人で良いものを作り上げようという気持ちのおかげで真剣に取り組むことができました。

私達の共通テーマに関する先生方からの評価は、「参考文献がほぼインターネットのみ」、「調査のために足を運んだのが宇都宮市役所のみ」のため、グランプリには値しないというものでした。この点に関しては、私達自身自覚していたことであり、指摘があるだろうと心配していた部分でもあります。もう少し余裕を持って、時間をかけて取り組むことが出来たら、さらにより発表になったのではないかと思います。早期に発表のテーマを決めて取り組むべきだということは後輩に伝えていきたいです。

他大学の学生や先生と交流したり、発表を聞くことはとても勉強になりました。私は人前で発表するということがとても苦手で、なるべく避けていましたが、学生のうちにこのようなことを経験できたのは良かったと思います。

今回の論文を書くにあたり、ご指導くださった先生、先輩方、そして一緒に取り組んだゼミの皆さん、本当にありがとうございました。

細川 いずみ

まちづくり提案と並行して準備を進める中、正直、行きたくないなあと思っていました。共通発表として考えた「雨水利用」というのは、私にとってあまり身近なものではありませんでしたし、何より、他大学が怖いという先輩方の脅しもあったからです。しかし、雨水利用のシステムが震災時に非常に役に立ったという話を聞き、徐々に興味が湧いてきました。むしろ、そんなに便利なものが何故普及していないのか、と考えるようになりました。

雨水利用の仕組みやメリット、市区町村・都道府県・国の取り組み、海外の事例を調べ、また水道局へのインタビュー内容から、私たちは問題点を見出しました。中でも、基準が確立されていないという点が、普及への障壁となっているように感じました。余裕があれば、気候・降水量等から私たちなりの「基準」を考えてみたかった、と少し心残りな部分もあります。

放射能の問題にはどう対処するのか、という質問は必ず受けるだろうなと思っていました。当然、放射能を含んだ雨水をわざわざ利用する必要は無いと思います。しかし、日本人の自然エネルギーや循環型社会への関心が高まっているのは確かです。それが電気だけでなく「水」も、と広まっていけば、雨水というのは注目すべき貴重な資源です。その点も含め、今後雨水利用の持つ可能性は広がっていくのではないかと考えます。

他大学の発表・質問には圧倒されました。「水・くらし・行政」という共通のテーマから、限界集落や羊水の問題など、幅広い提案が展開され、ジョイント合宿の醍醐味を存分に経験することが出来ました。また分科会は、より身近なテーマで独創的な発表が繰り広げられ、他大学の学生と意見を交換し、視野を広げられたのではないかと考えています。本当に勉強になりました。最後の打ち上げ、スポーツ大会も楽しかったです。

共通・分科会ともに、主に宇都宮市の例を取り上げたため、宇大は宇都宮ばかりだのご指摘を今年も受けました。来年はそうならないようにとの意味も含め、「海・地域・政策」がテーマとして掲げられましたが、海なし県である栃木・宇都宮を再び取り上げて面白そう、なんて考えています。短い期間で調べ、発表準備を進めたため、先生には本当にご迷惑をおかけしました。また取材にご協力いただいた方々、アドバイスを下さった先輩方、一緒に頑張ってくれたメンバーに感謝しています。ひとりでは何もできませんで

した。やってよかった、と心から思っています。本当にありがとうございました。

○4年生

佐々木 真美

発表者の皆さん、ジョイント合宿での発表お疲れ様でした。そして長い距離を運転して下さった中村先生と板谷さん、ありがとうございました。

今回のジョイントで素晴らしかったのは、何と言っても共通テーマでの受賞です。今年のはまちづくり提案のスケジュールが変更になりいつにも増して時間がない中で、皆さん本当によくまとめ上げたと思います。正直、あそこまで丁寧に仕上げてくるとは思っていなかったもので、ただただ感心するばかりでした。準グランプリ、おめでとう!!!

今回はサポート役として参加させていただきましたが、他大学との合宿はやはり刺激になるもので、たくさん学ばせてもらいました。ジョイントは他大学の学生・先生と交流を深めることができる貴重な場ですので、これからも中村ゼミの皆さんには絶やさず参加し続けていってほしいと思います。

最後に、スポーツ大会に情熱を注ぐ中村先生のためにも、来年は男子学生がたくさん入ってくれるといいなと願っています。

酒井 理恵

ジョイント合宿お疲れ様でした。遅刻して大変申し訳ありませんでした。合宿中は去年を思い出しながら参加していました。共通テーマでの入賞おめでとうございます。まちづくり提案もある忙しい中、時間を見つけながらよく頑張ったと思います。分科会の発表もとてもすばらしかったです。打ち上げでは、なんだか3年生より楽しんでしまったのではないかと反省しています。

来年もぜひ参加して、3年生をサポートしてください。

中村 佳代

今回のジョイント合宿では、「水、暮らし、行政」のテーマのもとで「雨水利用の現状

と行政の役割」と「地元学と地域社会」の発表を行った。夏休みから始めたインタビュー調査や、話し合いを進めていくうちに、雨水利用について次第に興味湧いていった。

当日の雨水の発表では、暮らしの部分が弱いことのご指摘を受けた。また、なぜ雨水利用を普及しないのかについて質問された。地元学では、地元学という定義は、宇都宮か日本か世界かについてご指摘を受け、どうやったら、実行できるかのプロセスを質問された。

また、今年も他大学の発表を聞き、非常に勉強になったので来年度の「海、地域、政策」に向けて新たな提案を促して欲しい。

最後に、新3年生に向けてアドバイスをしたい。実地調査やインタビュー活動を行うことにより、学ぶことが大きいので、そこから生まれた新たな発想を大いに生かして下さい。

松谷 剛

今回のジョイント合宿は、自分が発表する側ではなかったので、時間をかけて各大学の論文を読むことができ、分科会では質問者の立場から意見交換をする機会が多くあり、前年とは違った経験をしました。打ち上げでは他大学の先生や学生と交流し、実りのある3日間になりました。また、スポーツ大会では怪我なく参加することができましたが、去年、今年と満足のいく結果は得られませんでした。来年こそは宇都宮大学が活躍することを願っています。

今年はまちづくり提案と日程が近く、3年生は時間が少ない中でとても苦労したと思います。その中で、完成度の高い論文やパワーポイントを作成し、準グランプリを獲得したことは非常に誇らしく思います。もし去年が今年のような日程であれば、自分は決して今回のような論文は書けなかったと思うので、今年の3年生は本当に力があるなと感じました。こうした3年生の頑張りを見て、自分も負けずに卒論作成に臨もうと思わせてくれました。本当にお疲れ様でした。

○院生

白 宝花

今回ジョイント合宿に参加した皆さんお疲れ様でした。特に3年生の皆さん本当にお疲れ様でした。私は宇都宮大学、行政学中村研究室の大学院一年生として今回のジョイント会に参加しました。それぞれの発表を聞いて多くの刺激を受けて、自分の修士卒業論文を書く能力がまだまだ熟してないと感じました。

子どもの時から青い天空で白雲が浮かんで、広い草原で馬が駆けているのを見ていまし

たが今回は初めて海の青いと広いを見て嬉しかったです。

南 勇文

皆さん、お疲れ様でした。初めて合宿に参加するが、本当にいい経験と思います。共通テーマが受賞され、おめでとうございます。今後、就職活動や卒業論文のステージにおいても必ず役立つものです。運転手も大変ご苦労様でした。

宇都宮大学国際学部行政学研究室担当教員

中村祐司

最後まであきらめない粘りが賞に

ジョイントに参加するようになって16年ぐらいだろうか。ジョイントそのものの歴史が四半世紀に達したということなので、この研究室もいつのまにかジョイント主流メンバーに仲間入りしたことになる。

そうしたなか、今回は数あるジョイント参加において、実に初めての経験をした。何と行きも帰りも車中での運転手(私)と同乗者との会話がほとんどなかったのである。

とはいってもこれは教員とゼミ生との関係が険悪であるからといった理由ではなく、助手席のゼミ生の車酔い対応のためであった。いうまでもなくドライバーは、後部座席のゼミ生には背中を向けており、運転中にはなかなか話しづらいものである。助手席に座ったゼミ生にはナビ役をお願いすることもあり、自然の流れで会話が多くなるというのが、これまでの通常のパターンであった。

ところが今回の場合、行きも帰りも助手席のゼミ生は宇大正門スタート直後から目をつぶり、ずっと眠っているような状態だった。加えて2列目シート、3列目シートのゼミ生もほぼ爆睡状態。こういう状況というのは、自分がうとうとしてしまっただけという妙な緊張感と同時に、妙な心寂しさも生じさせる。加えてこの歳になると静寂という僅かな居心地の良さを感じたのも事実であり、その意味で今回のジョイントはまさに珍道中の一つではあった。

その他にも、2日目の朝にゼミ生が早朝に釣ってさばいてくれた、鮮度極上のイカの絶品を味わうことができたのも初めての経験だった。

共通テーマは参加者全員の前での発表となり、その分緊張感も増す。問題意識の強弱の点では宇大は後者に属する印象だったものの、発表の流れや関連情報の把握と整理・提示、いわばそつのなさといった点では、ひいき目ながら、かなり良かったのではないかと。事前

に相当準備して臨んだことは、誰の目に明らかだった。その結果が、皆でつかんだ準グランプリ賞につながったのだと思う。

分科会では残念ながら、他大学の報告に張り付いたので、発表を見守ることはできなかったが、表彰審議の際の他大学教員の話や後に配布された議事録から、これまでやってきた力を出し切ったことは間違いないと受け止められ、教員として非常に嬉しかった。ともあれゼミ生は他大学学生の強烈な問題意識や、表現の押し出しの強さ、ひいては各大学が持つ校風を目の当たりにして、宇都宮大という居心地のいいキャンパスコミュニティにはわからない多くの示唆を得たはずだ。準備の過程では、投げ出したくなる時も多々あったに違いないが、逃げずに向き合い続けた結果、誰もが勝利者となった。教員にとっては大変な喜びである。

少人数で奮闘した幹事校の四日市大学と、毎年お世話になる会場校の中央学院大学に、このような貴重な機会を与えてくださったことに感謝したい。

宇都宮一館山間の往復のルートについて、ほとんど高速道路（北関東道、東北道、首都高速道、京葉道、館山道）に乗っている感じで、近年における道路行政整備の恩恵を肌で感じた。帰りは3度の休憩を入れて3時間40分ぐらいであった。行きの注意点は北関東道に入ってから、水戸方面には行かないこと。また、館山道を降りた後のコンビニ休憩後、すぐに左折2車線に出会うが、ここは慌てず表示どおりに左折する。その後は今回のようにあまり直進し過ぎずに、早めに右折して海岸沿いの道路に出た方がいいだろう。

帰りは、京葉道の降り口が「篠崎・小松川I.C」であることと、一般道に降りてからの右折のタイミングは「東？小松川交差点」で、直角に小松川病院とセブンイレブンがあるので、それを目印にすればいい。その他としては、東北道パーキングであやうくETC専用の駐車場に入りそうになったのと、北関東道の降り口はあくまでも「宇都宮・上三川」である点に注意しておきたい。